圓光大師傳

廿七廿八

法然上人行狀畫圖第二十七

武藏國の御家人熊谷の次郎直實ハ平家退討の時所々の合戰に忠ありて名をあげしうは武勇の道なゝびれりきたつの風に宿善のうちにそなはりしやるや幕下將軍なりしを申事ありて心をたてゝ出家して蓮生と申なり聖覺法印の房に尋行く後生菩提の事なり尋申なりて尤樣の事に法然上人に尋申

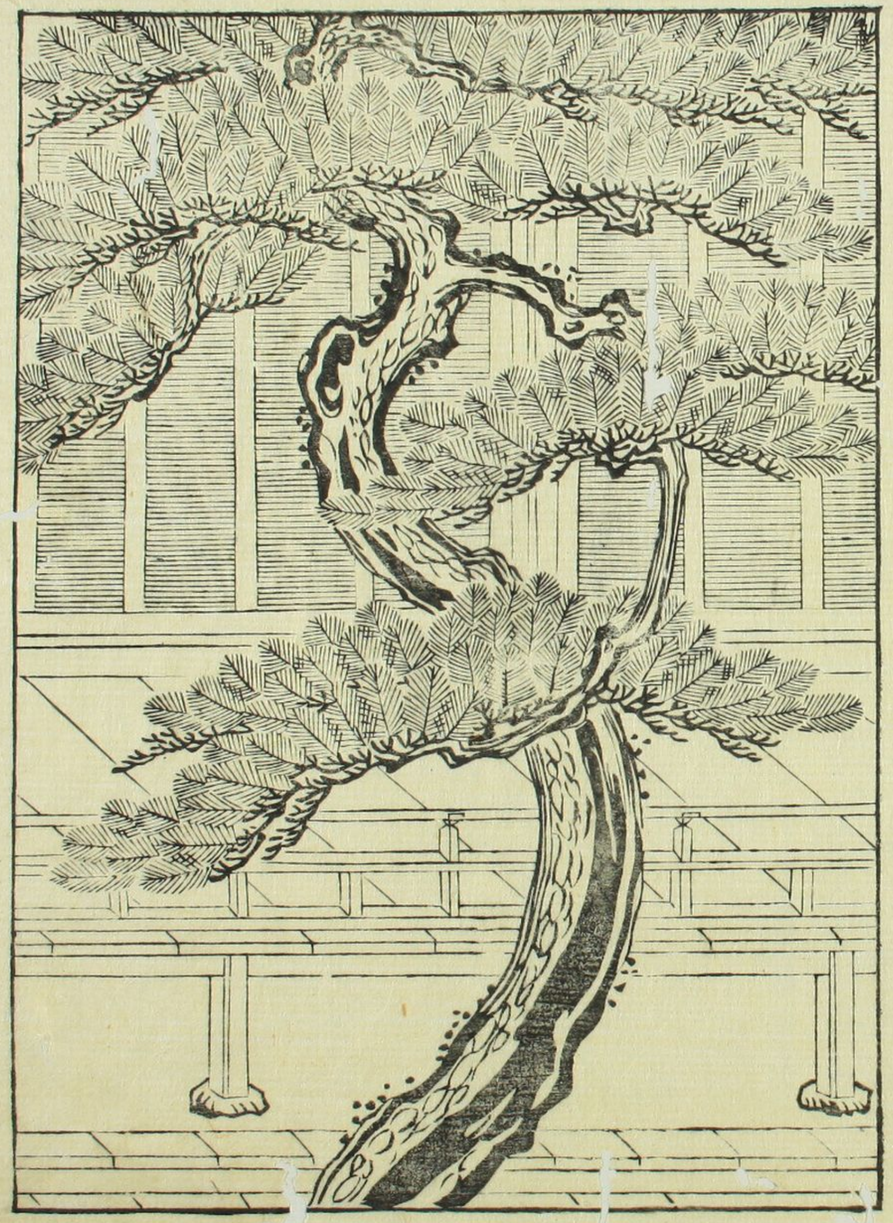
大曜文庫

ゑ〜と申されたまきは。上人の御庵室よ参〜よ
たち。罪の軽重成いと〜ぶそ〜念佛ぶにを申
ぶば往生するなり。別〻様なこの法を聞て。
ちん〜と泣たまきはそ〜かぶと思ふて物も
の法ぶ法ぶそ〜あわて。何事よ法ぶろやと
ぶ〜またれた。手足をもきり命成もすてて。
後生ハたすこのんとそ〜ぶ法ぶんと存する
所よたく念佛ふを申ぶは往生ハするぞと。

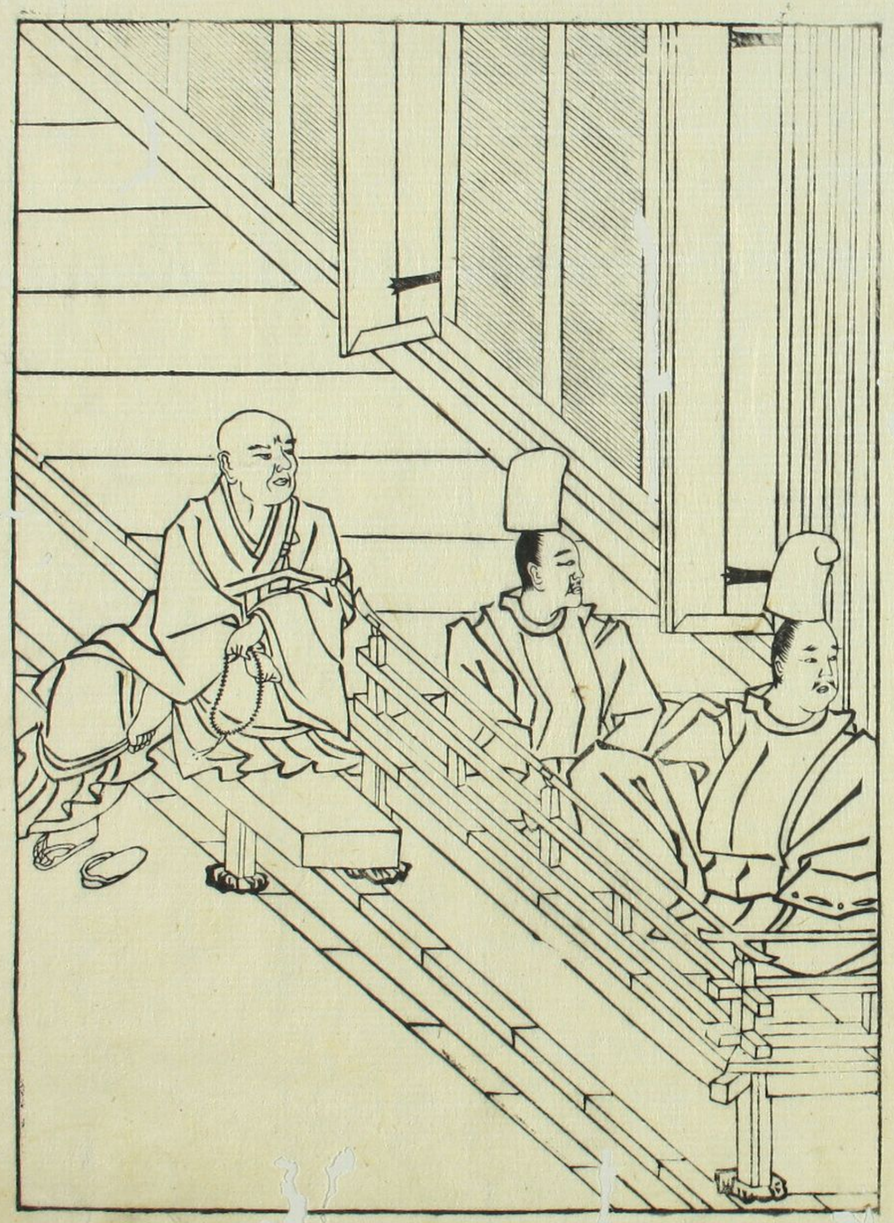
やそ〜と仏を拝まきてあまわにうまし
ゆてたな〜れ仏ぶよ〜をを申たる。誠よ後世成
恐たるもと見えたれ。無智ハ罪人の念佛
申て往生する事。本願の正意なりとて。念佛の
安心こゆ〜て授法たれ。ぶる心なき専修ハ行
者にてぴさ〜〜上人よたゝへ参てまつわたわ。
或時上人月輪殿へ参〜法たるり。此入道推参
して御供よまいわ事成ぶ〜ゑんぶやと思食

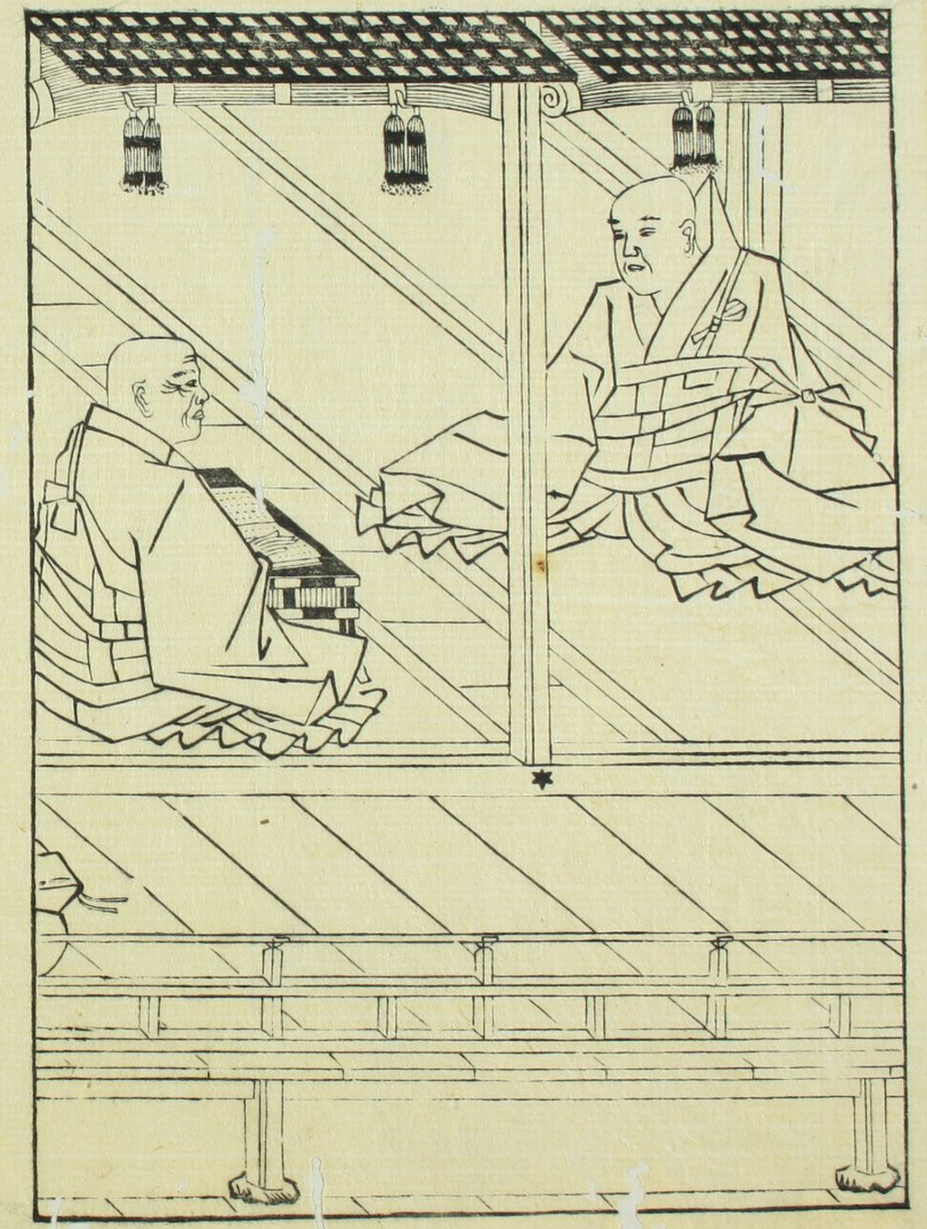
はれなまこころをぢるくせ者なれば申しあ
うわぬと思食て仰せ蒙なりなれば月輪殿
まて尋いわてをりぬきり侍して縁より手
うちのけをわかりまて結なる。御談義は聲の
すうてきこえなれば。此入道申なりあるは
職業柄り口たきを所あり。極樂よりう為
差別いあるまきうの後談義の御聲を
きこえバこそ。うり聲より高聲り申

なる後禪定殿下きこうめてをいなるものて
と仰せれなまい。熊谷は入道とて武藏國より里
もちのほわたるくせうの侍う。推量より供を
して侍と覺侍と。上人申給なまこと侍さ
たく勢せらて御使を出されてめされなる。
一言は色題よりを及ぶ法度うて先より隨てち
く大床より伺侍して聽聞仕なり。往生極樂ハ
當來は果報なをとをり。忽より堂上をゆされ



今生(こんしやう)の果報(くはほう)を感(かん)じぬる事。本願(ほんがん)の念佛(ねんぶつ)を行(ぎやう)
ぜば。いうてこの此(この)式(しき)に及(およ)ぎ。耳目(じもく)に
きてを見(みえ)ぬる





蓮生念佛往生に信心定して後は偏に
上品上生乃往生疑のそこ我若上品上生に
往生疑遂まじくは下八品よを迎へられきと
いひしとい[illegible]る記願をたてて發願乃
有趣をもへ偈疑結て自ら疑書けるに
状云元久元年五月十三日鳥羽なる所にて
上品上生に来迎の阿弥陀ほとけに御前にて
蓮生願を發て申ける極樂に生れたらん

よい身の樂乃疑は下品下生なりとも浪あり
然共天台に御釈に下之八品不可来生と仰られ
たりたなくの一切の有縁の衆生一人をのこ
ちに来迎せん無縁乃衆生をも思ひをうそ
とおもうんがゝめて蓮生上品上生よむまれん
ちゝぬ疑なゝい下八品よりむまるゝ事ゝく
願をおこして後ゝ[illegible]ゝく惠心に僧都すら
下品の上生疑ひなゝり何況末代乃衆生

上品上生する者は一人を乗じて聖衆房の
行ぎょうある後聞なくして願をたてゝ
いくゝ未代に上品上生するをもあるまきに
おうもよろしく不當なる蓮生いかて上品上生
よい生るべきそなれくい下八品よい生れしと
願したれとて阿弥陀ほとけを迎接
第一に弥陀の本願をぶれ弥陀なんと次に弥陀の
慈悲うけ弥陀なんと次に弥陀の願成就文破邪

弥陀なんと次に釋迦の觀無量壽経に十悪乃一
念往生五逆に十念往生又阿弥陀経乃若は一
日若は七日の念佛往生又六方恒沙諸佛乃
證誠又善導和尚に下至十聲一聲等定得
往生に釋又たとをり觀経乃上品上生に三心
具足の往生ぞれを善導の釋に具足三心必
得往生也若少一心即不得生又專修のものは
千は千なるに釋とをくをこを弘佛に願と

いひ佛ゝ言といひ善導の釋といひ若まこせい我
迎へ給ふ事をもて破きて各妄語の罪を得
給ひたんをいうて大聖の金言むなしうして
きやゝ又光明遍照十方世界ゝ文又此界一人念
佛名の文此金言ともむなしかゝいよ〳〵
これらの文をもて疑なれもとたりゝ一切の
有縁の輩即立歸て迎へんとて願を發て
上品上生たゝ給ふいむへられまゝせとと

いふる願を發したるのよくひゝ事なんと
ちやゝ五逆の者ゝかわはあゝ者ゝの我いいう
なりとも迎給ふぬこと疑ぬ心ハ
三心具足したゝ上品上生にむまるへき定
心我發したゝそれ疑煩惱斷したゝそのゝ
ゝ我ひゝいゝゝ善導又天台此事我ゝ者ハ
上品上生にむまる又衆生ゝ苦我ゝ事を得
又無生忍をたゝる又極樂ゝ願ゝ隨て

生涯をこの願へる
下八品の往生をすてゝ上品を願の心なれ
國土よりうばいとりてこれいちのへゝ来事
あるべきことなり。のちよりてこそ我願り
をいて。或ハ信じ或ハ信ぜぬんをも。願の
こゝの信と謗らを因として。これまこと
浄土よむまるゝ
千時元久元年五月十三日午時よ。偈の文をむ

とひて。蓮生いま願をおこす。然谷ハ入道年ハ
六十七なり。京ハ鳥羽よりて上品上生の迎へ乃
曼陁羅ハ御前にてこれをゝ 已上取詮 又和字の
偈ハ文を。隆寛律師。漢字よりかきたるこれなる

下八品往生
我捨而不願
致彼國土已
即不能還来
重乞於我願
或信或不信
願信謗為因
皆當生浄土

又蓮生自筆ハ夢の記云。上品上生にむまれ
給へといぬる夢たしかに見へ給ふ。そゝ人もそ
告たわ。善導ハ夢を見給ふ。ゝ給ひて觀經の疏ハ
作給へわ。惠心又往生要集。夢ゝ見て記し
給へわ。又珎海変定往生集。夢を見給ふ記し
給へり。法華經ハ四安樂乃行者ハ夢ハ中乃
八相を記し給へり。まつるゝまんせい五月
十三日に此願を發て。同廿二日ハ夜。阿弥陀佛に

申ハく。蓮生ゝて此願成就ゝへくゝ。
疑ゝかゝん御示現ゝべ又叶ま〳〵ゝ。叶ぬ
ゝと示現ゝべたゝ。ゝぶゝ法ゝゝぶまゝ
ゝん示現たゝべと申て祈ゝるゝハ夜ずれ
ハゝ夢ゝ見ゝる樣。金色の蓮乃花のくきハ
くゝ枝をたゝくて。ゝ祈くゝて出ゝ一本
立たゝたゝのめゝわゝ。十人ゝゝ居まゝ
ゝてあゝて。蓮生申事ゝ。ゝ人ハ一人を

あれが上よはのほうえん。蓮生一人と。一定
のほうへきなわといひうつきとぃうにして
のかわたわとうとおぼえすしてその蓮の花の
上よのほとて端座して居たわら見うつきハ。
夢さめをいわぬ又願をたこすこれ願まこと
なうへくい。臨終よゆくしかうん人こ耳同お
とうくうわれ瑞相をよび現してこ移
くれへよ。孫陁の本願見うしやはせ孫へと。

おこうもり故り上品上生れ往生いよく
疑なきれわ。又同年六月廿三日れ夢。同し
心れわ 已上取詮
蓮生自筆れ發願の文夢記等ハ。これ和字
れまといへこと。ふくきよよわて。ゆこ
漢字よなし

蓮生行住座臥不背西方の文をつく信し
なるにやあらんさはよを西を背よせざり
きれん。京より関東へ下る時を鞍をさう
ちまにをうせて馬よをさうちまて乗らく。
口伝ひをせるとなんぢきを蓮生
浄土よをこうれをものとやさるらん
よしにむひてうらせもと
とそ詠しける。上人を信心堅固なる念佛の

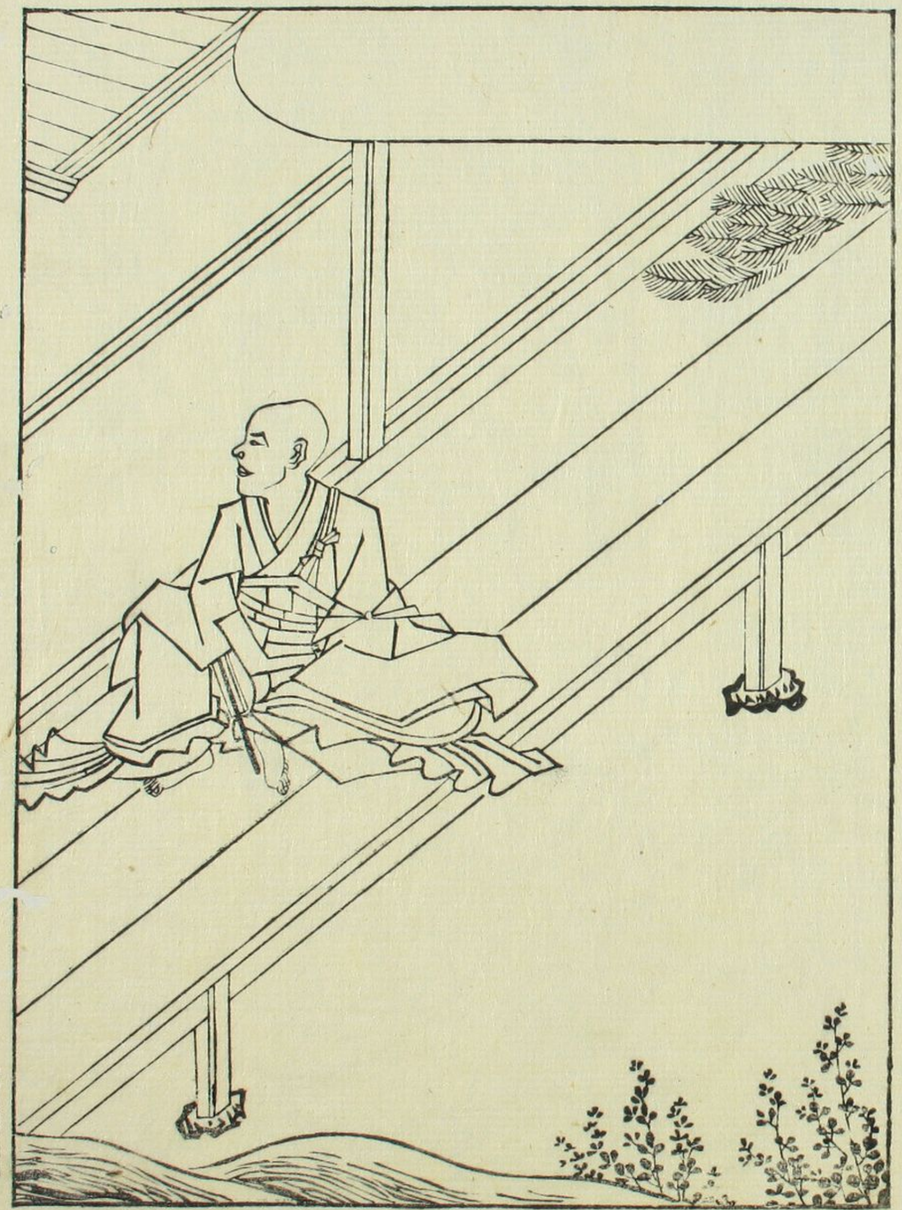
行者のためしよは常よ思ひ出ぢて坂東の
阿弥陀ほらけとそ信しをる志の程も其
性たけくしてぶを犯人をは或ハ馬船を
うばけ或いほぶ伝うち或ハ志ぐわ或ハ筒伝
うけなくていまめをきらわよに心えぬ
よばよくそあわなる。下國の後不審なる事
こを申状ををて尋申ける程ハ上人の御返事云。
脱てうけるまわ俗ぬ實り其後おぼつ

たく侍つるにこそまことく行ゝれ〻く侍。但念
佛の文書てまいらせ侍。念佛の行ハ。の〻佛の
本願に行よて侍。持戒誦経誦呪理觀等に行ハ
う〻佛の本願よあらぬをこれひよて侍へと。極樂を
祈りん人ハまゝ必本願乃念佛に行をたゝとめて
ぞうへよ。こゝ〻こなひをも。念佛ゝくへ
侍りんと思ひ侍ゝ。ぢをたゝまつり侍。又ゝ本願の
念佛ゝゝりよても侍ゝ。善導和尚ハ。阿弥陀

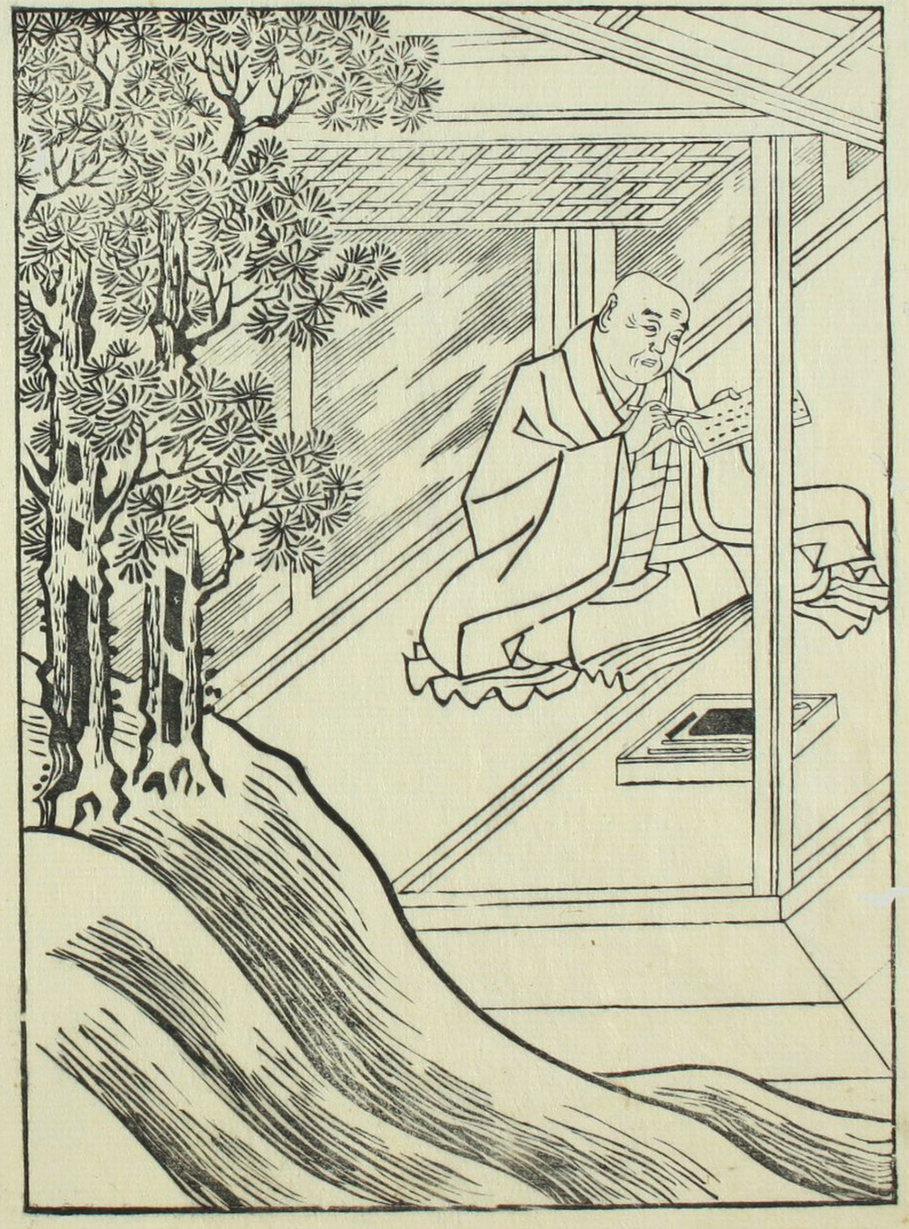
佛に化身にてたゝまつり侍へと。それ〻ハ。一定
ふて侍へと申侍よ。孝養の行を佛に本願よ
あらぬ人よ随てぞうめたゝせたりまゝ侍。
又銅の阿字に奉も。錫杖の奉も。佛乃本願り
あらぬとあにくく侍とてをかゝても侍なん。又
迎接の曼陀羅ハ。大切よたりまゝ侍。それも
次の奉に侍。たく念佛を。三萬若ハ五萬若を
六萬。一心よ申ぢたりまゝ侍りんそ。定

往生はとなひよりて候。善根は念佛の
いとなみ、この事より候。六萬遍をぶに一心よ
申させ給へ。それ外よい。何事候へ。ゆゝしき
たゝまつる。まめやかに一心よ。三萬五萬念
佛をたとめさせ給へ。少こ戒行をふれさせ
たゝまつる候。往生いとよわ候まき
事に候。但此中に孝養の行は。佛の本願よりは
候へとも。八十九よりたゝまつる候なり。あひ
このまへてゝ。ゝなんといまらまいゝせさせた
ゝまつること覺候。たゝひとりものをまいゝ
でておゝまつる候なるに。この御法をまいゝ
らせたゝまつる。五月二日　源宣

武藏國熊谷入道殿御返事　已上取詮



蓮生ゝ往生ゝうひあるまきよ。或ハ佛乃
告げ夢ゝ。或ハ不思議ゝ奇瑞ゝなどゝ伝へる様。
上人ゝ申入ゝる事。かくまたゝなれゝ。月輪の
禅定殿下聞食ゝられて。上人ゝ尋申さるゝる
御文云。熊谷ゝ入道。往生ゝ様ゝ聞ばといへども不思
議の奇瑞等。一ゝあゝさゝ有ゝ。天下にあまねく
うゝひうたゝ事。ゝ實たゝゝ。寂前ゝ告
げゝゝ所ゝ今ゝまて無音ゝ不審也。孫陪



利物。未法偏増の證。たかくのこゝろの事ハ
あるゝ。随喜感涙。たらへをらるにをのなり。此
事ハ善哉善哉。條〻ゝ一向帰依求よあるべ
しるよ。御疑のある歟。猶ふ心さしのあらく
ふるさハ。たゞ阿弥陀如来乃知見よりせたく
まつるをのなり。但宿障深重乃ゆへよ。至誠心
こそ術なく侍へ。信仰帰依求の條ハ。此ころ假名
新撰等の中よ。強よ恐思給へらるもの。

いゝ〻〻来六七日の間。必見参をとゝろんぜ
たりよ。申合へき事等ある也へなり。敬白

四月一日

法然御坊　已上取詮

礼紙云。のの入道のまいらする状正文を給て。
見ハ我加へんとたりよ。轉寫の本の文字。たゞし
かゝ侍してよ。ゆゑ。ゝるところあるゝ。比校すへき
をのあるの事の次第給たくひきくらべ。正しく

往生願らけ給ん人は超過し畢ぬ貴へし
信ずへし。元左右にあるハさ為を以なり。宿
善ありたる。申てあまりあるそれ子息れ會釋
又以珎重。一これ事。皆以不思議れ境界なり。
ふを感涙禁じがたく紀數兼及よ随て馳申所也
御返報れ趣その草あ為を見れ志あ為いん已上取詮
上人熊谷入道よりたまはされる御返事云。此條
こそ〳〵申よ及ハ次同出俗へ往生せる物語

たんよりはずぐまて覚俗。死期知て往生ら為
人〳〵ハ入道殿よ限ら次多俗。加様よ耳同ならら
ら次事ハ未代よいよを俗り。昔を道綽禪師
ら加ら〳〵ぞ。返こを申ら物く俗。
但何事につけて。佛道よハ魔事と申事れ。
ゆゝしき大事にて俗也。よく〳〵御用心俗へきら。
加様よ不思議を示よたりをも。たりを伺事も
俗ぬ為ま也。月出俗ら随てるゝ覚さ物

孫て加様よ申候たらぷくく御たくしこ候て。
佛よも祈申ぬいせさせ孫へく候。いけの御のわわ
候へさ。うぬへてく。のこほ〜せたりませう。京乃
人こと大様ハこれ信〜て念佛をもいますること
いさこあひて候。これにたくて言ぷよくすませ
孫へく候。あ〜さまに思食すへく候。なをく
月出候。あれうこく

四月三日　源宣

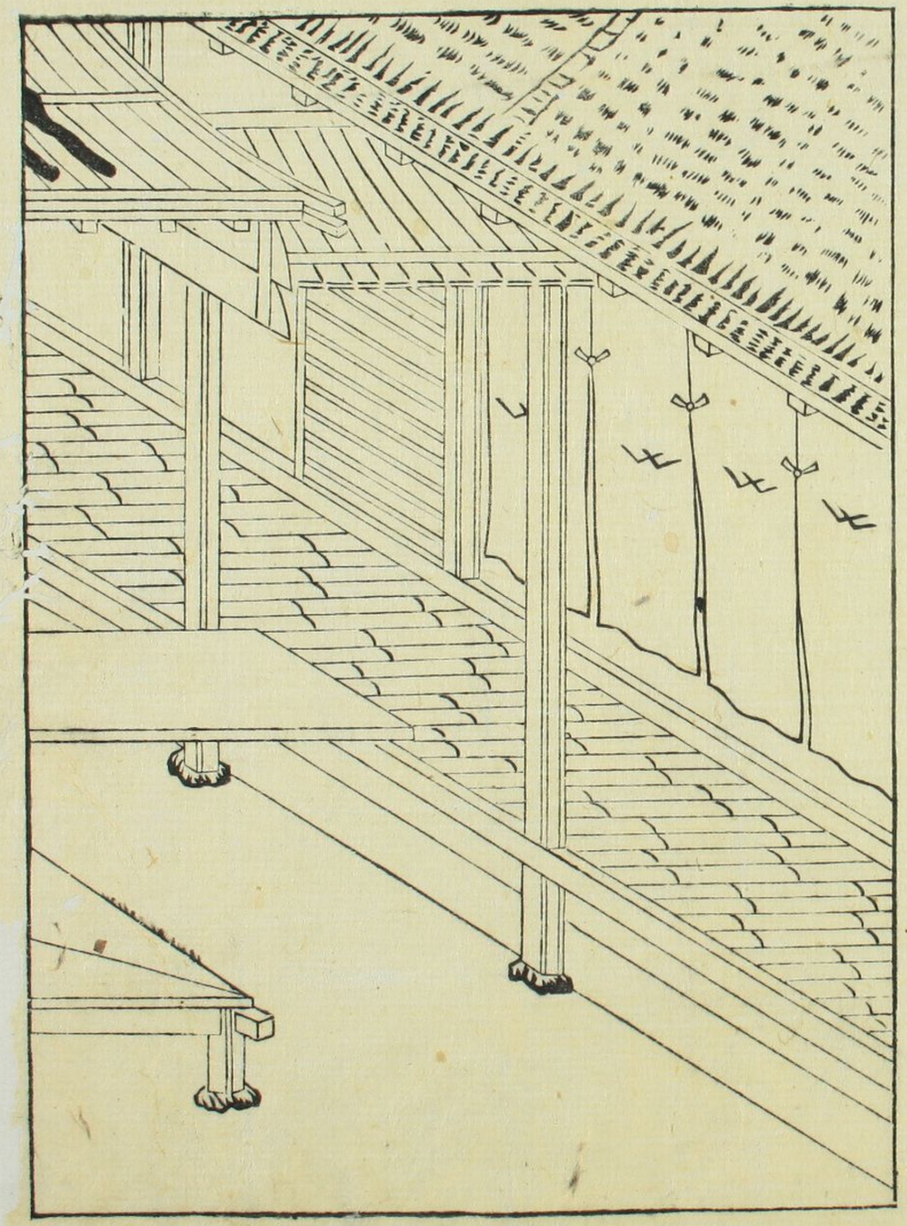
熊谷入道殿　已上
取註

建永元年八月より蓮生は明年二月八日往生すべし。
申所り不審あるべし人へ来て見聞きよ。
武藏國村岡の市より札を立させらるべきく
輩遠近をわかず熊谷の宿所へ群集する事幾
千萬と云事なき故とて其日にあはざれば
蓮生未明より沐浴して礼盤に上て高聲念佛
躰をせしる事たらへをるにてあり諸人食を
とゝのへ所に暫あらて念佛を留め目を開て

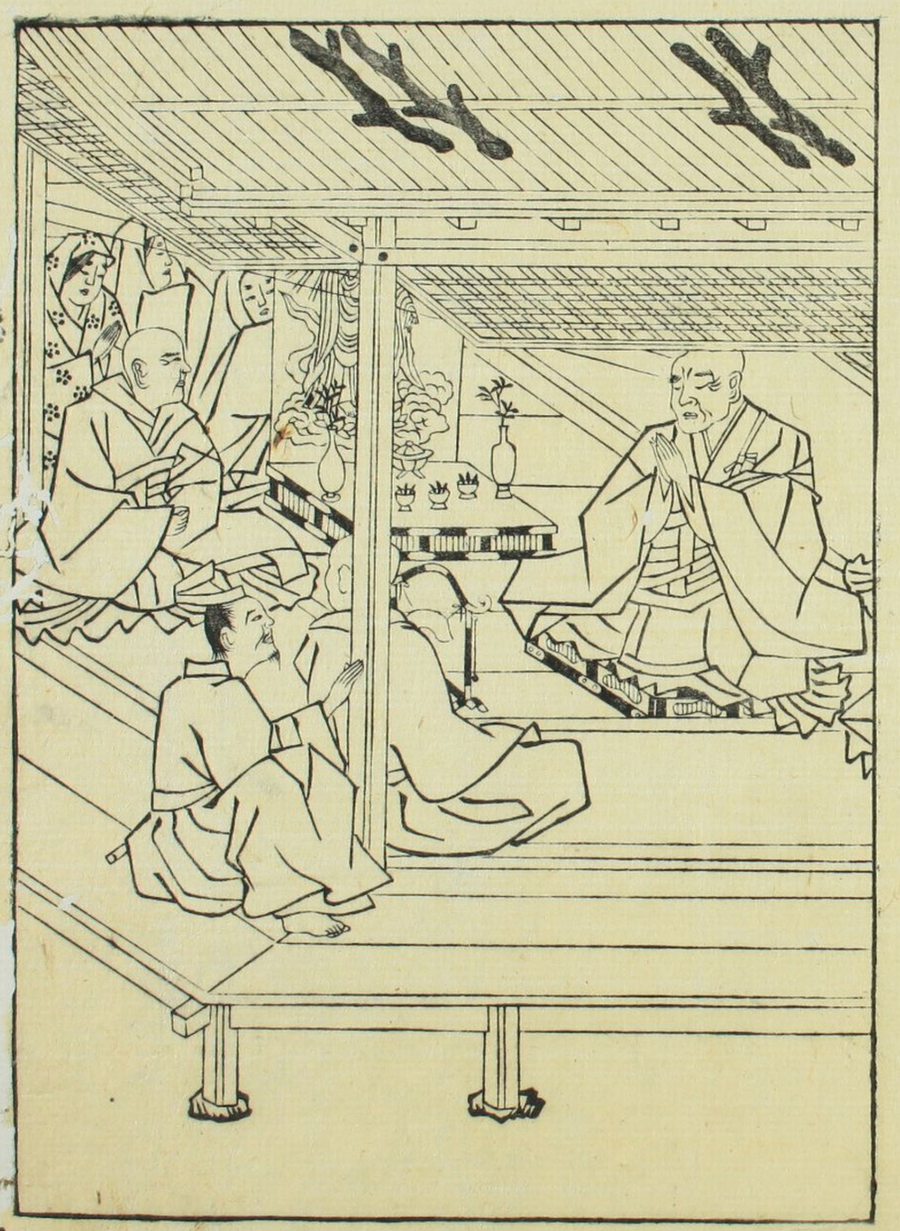
今日は往生は延引せり来九月四日必本意を遂
げべし其日来臨あるべしと申されて群集の輩
あるべからざるなりてゝ妻子眷属面目なき
ものなりと歎き給へ弥陀如来の御告にとりて
来九月を期る所なり私のなくひとり
あるべきにて申なるぞ此世は光陰なくう
ちて春夏をすきるべし八月は来り。御
おやむ事あるべきの九月一日をもつて音樂成

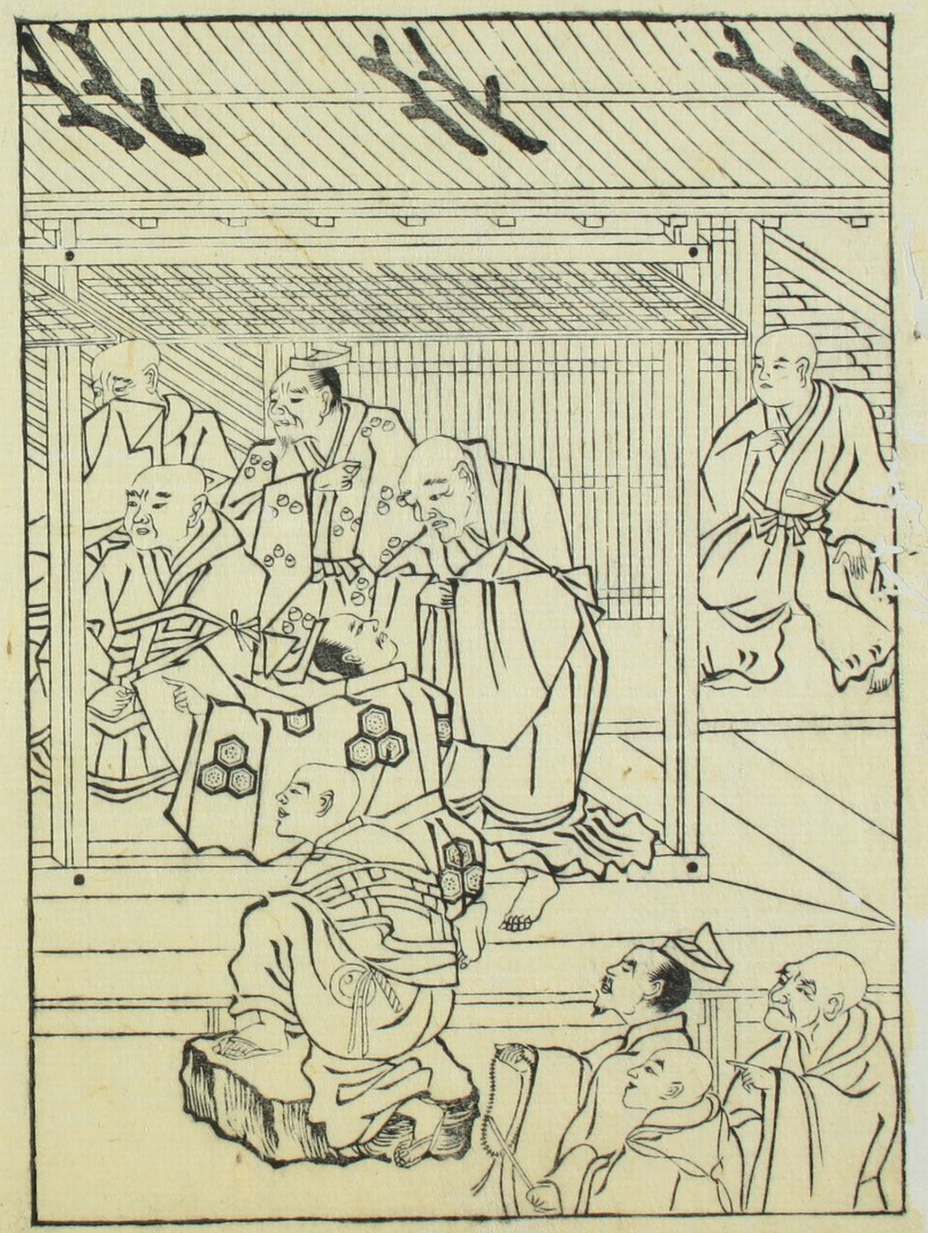
聞て後更り苦痛なく身心安樂なり四日目
後夜に沐浴してやうやく臨終の用意をなす。
諸人あつ群集する事。盛なる市のごとし。
すでに已刻に至て上人弥陀来迎の三尊化佛
菩薩の形像を一補り圖繪せしめて秘藏し
給へるを蓮生洛陽より武列へ下るとき。弟
子たちなる法懸奉りて端座合掌し高聲
念佛熾盛にして念佛と共に息ゐとまる時。口

より光明放ちなること五六寸ばかりなり。紫雲
靉靆として音樂髣髴たり。異香芬郁し。
大地震動し。奇瑞連綿として五日目卯時より
いたる。翌日子刻より入棺のとき。又異香音樂
等の瑞ありしのごとし。卯時よりいたりて紫雲
西より来て家の上にとまる事。一時あまり
ありて西に去りて去ぬ。これらの瑞相等遺
言によりてせて聖覚法印の祥へ註しをくる



今是往生の霊異ずることの比類まれなる事に
なん侍らまほしく覚へ侍り上品上生の往生さま
うらいの事とそ申あひ侍る





法然上人行狀畫圖第二十八

武藏國に御家人津戸三郎為守と生年十八歳にして治承四年八月より幕下將軍（千時兵衛佐）石橋に合戰の時武藏國より馳參して後安房國へ越給しよりおなじくあひ隨ひ處々に合戰し忠功致し名譽あけぬと云ふ。建久六年二月東大寺供養のために幕下上洛の事あり。為守生年三十三にして供奉し給ひ三月四日入洛し。

同廿一日上人ハ菴室ヨリ参りて。合戦度ニハ罪を懺悔し。念佛往生ハ道理兼ねて後ハ。但信稱名の行者となりて。ひたすら本國りくぐりてもなることたりなるを。或人熊谷乃入道津戸ハ三郎ハ無智ハ者ヨリて。餘行ハ。ひたすら念佛ばかりをハすめたまふ。有智ハ人ハ。必ず念佛ハ限ぬへき事と申ハ。ひたすら為守ハ聞て。上人ヨリ尋申ハるに。係ハ乃不審を申入ハ。上人ハ御返事云

一熊谷ハ入道津戸の三郎ハ無智ハ者ハ。ひたすら但念佛をいすんたる。有智ハ人ハ。必ず念佛ハ限ぬへき事と申ハ。聞えハ。ひたすらん極たる辯事に侍。ハ故ハ。念佛の行ハ。本より有智無智ハ限ら。弥陀乃普誓ひ殆ず本願を。あまねく一切衆生の為なり。無智ハ有智ハ。念佛を願し。有智ハ

餘ハ行を願しなり。十方衆生乃
旬よりろく有智無智有罪無罪善人悪人持戒
破戒ことをいやしきを乃至皆こゝろ
ゝれるなり。
ゝれを往生ハこゝろ問尋ハ人ハ有智無
智を論ぜず皆念佛の行をかゝ申ハなり。
まるよそゝ事をうけて尤様に念佛を申
らめんとするものい。先ハ世ハ念佛三昧浄
土ハ法門をきゝ後の世に又三悪道へゝる

ゝをきゝ申まるゝ尤くて尤様ハ事をゝた
くゝ事にて候なり。其ゝ聖教ゝり
見えゝく候。見有修行起嗔毒方便破壞競
生怨如此生育闘提輩毀滅頓教永沉淪超
過大地微塵劫未可得離三途身と申たる
なり。此文の心ハ浄土を祈ひ念佛を行する
をハをゝてハいゝ候ハ。毒心をゝくゝて。
ゝゝゝをめゝゝ。やゝくハ方便をハ

して念佛の行を破ることあるべきにてあるべし
なり。これをとゝのえんとするゆゑにかくのごとき乃
人いまだ知てうこみる佛法の眼をあて佛の
種を失へる闡提の輩なり。弥陀乃名号ハ
とゝのへくゞき生死を忽に切く常住の極
樂に往生すといぬ。頻教の御法をそしりほ
ろぼすく。此罪によりて三悪道よりいでて
大地微塵劫を過ともなく三悪道の身をも

なるべし。ゆゑにいへる当なりぬ。ゆゑに仏様にて
事ハ申さくして申ハ人をいゝへわてあハ
きしひきゝ。ゆゑに仏様の申さんよりて
念佛に疑をなり。不信をたてさんものいぬよ
りてぬ。ゆゑ乃事にてくそハ仏ハめ。大方弥陀よ
縁あさく往生の時いるぬものいきけこと
信ゆゑをこなり。ハ腹をていりハ
ふくこてさまるけ。ハ腹をるこにて仏也。

それ心をえらくいうて人申さるる御心ざしは
ゆるぎなき強き信ぜらるる人佛ぶつ
力をうしたまふまし。何況凡夫の力をよん
まうき事ばかり申ぶつ衆生ぶつ利益
ぶんこれをうんじたもうて極樂へゆいて。
はしらをひきて生死よかへらて。誹謗不信の
者をもつて一切衆生あまねく利益せんと
おもふへき事にて侍也

一念佛ぶつ申さるる世ぜうんよは。心をつよにうけて
口にわとなえを唱るばかりにてたきこえて侍
なりたとひ身もきたなく口もきたなく
こころも心を清らかにして申さるる事。返て
神妙に侍ひまれなる様に申さるる世ぜうんこそ。
返て同出たく侍へばうれしんらきなりとて。
ものもおすまして申さるる世ぜうく。往生ぶ業に
うれしら清ぶ侍ぶるなりかいれ面ぶらき

ゆえ申されざるん念仏を申さんやと
思ひ給へきさま申さまんをねんごろ申させ
給ぬるといいて給へきたくいられ給おもも
きこゝいはば申ばせ給ふ
一あるぬ行ぞさうりれ人をひとびとぐ
志おろく信ぐ者こゝ給まる。異解異学れ
人をゝいていこゝ敬恭敬してゝろめあれ
ゝる事なるれと申たるこゝてく給也阿

弥陀佛ゝ縁なく極樂浄土ゝちまりすれ
うゝん人の信もたこゝ給弥ゝうくなるん
ゝいゝ力をゝゝ給ぞく心ゝはゝせくいられ
をこたひをゝて後生たゝりて三悪道
ゝれ者こゝ給人の心ゝまゝゝひくゝゝ
給へきれゝ又ゝわゝかゝてゝのれひぬ
人ゝいゝ阿弥陀佛給すゝ給極樂給弥ゝのゝす
色さにく給そいゝ申ゝてこれ世の人れ。

念佛よりて。極樂をむまれて生死をはなるゝ事。疑なきゆゑなり。そもそもいとこの生死をはなるゝ。ゝ信せばゝんとをもはをいかゝれてこゝろ安きにて侍るなり。已上取詮これ御返事なり。後いよ〳〵念佛外他事なきゝなり。

又こゝやうて。專修念佛の行人。諸國中に三十餘人まてよりあつまれり。此由申上人へ申入るゝ。上人御返事云。專修念佛の人。

世にあらかゝる侍るよ。それ一國。三十餘人まて侍るゝそはめやうにあいれ侍へ京邊なるものゝにまてなるひゝるをゝを見なるひ侍めへきを所よて侍るをを思切て專修念佛する人。あらかゝれ事にて侍。道綽禪師。平列申侍所をゝ一向念佛の地よてい侍しゝ專修念佛三十餘人いよに。あらかゝる覺侍。ひらへる御力又熊谷の

入道たるのゆへよりてこそ往生なれそもも時の
いろりく往生すへき人の多往へたゆへより
こそ往ゝめ。縁をきこゝいろこゝろ人のすくえん
往ゝまゝこそ叶はぬ事にて往へはよりて子細も
こゝせ弱ぬ人たゝのたゝきんよりへき事
ふてこそ往はぬりをとより機縁純熟して。
時いろりたるゝこゝにて往へこそこゝにわゝ
専修ゝ人なんとい往ら先とをゝこゝ往往。

念佛往生ゝ誓願ハ平等の慈悲ゝ住しく。
發しゝ弱ひたる事なれそ人をきゝめこゝへ
往はぬなり。佛の御心ハ慈悲をこそ躰とする
事にて往なりぬきハ觀無量壽經ゝハ佛心と
いぬハ大慈悲こゝをたりと說きて往善導和尚
此文を受て此平等ゝ慈悲をこそ普く
一切を攝すと釋したまへをこそ一切の言ひろく
しこそ人往へゝ往ゝ往ゝ念佛往生の

願いこれ弥陀如来の本地の誓願なり。餘の
種々の行いは本地のちうひよあるべし。釋迦を
世に出ぜる事は。弥陀の本願をさうんと思食
御心よりて衆生の機縁に随ひ説給ふ。これ随機の
日は。餘の種々の行をも説給ふ。これ随機の
法なり。佛のこゝろは御心の底よりの御法。
ひたすら念佛は。弥陀よりの利生の本願。釋迦よりの
出世の本懐なり。餘の種々の行よりの似を

似也 已上取詮 此行を兼ねて後いのすくいは
こゝなり。念佛の外他事なりき

津戸の三郎。上人の門弟浄勝房。唯願房等の
僧衆に申さるゝ。念佛の先達にて。
不斷念佛をとゝめたまひたる故。為守聖
道の諸宗を謗じ。專修念佛を興するよし。
元久二年の秋の頃。征夷將軍 右大臣實朝公 より。
あゝぬさまに讒し申者有て。召尋らるゝ
由聞えしかども。為守驚き怪しる
事あるべしと。申上げべき。難答の詞假名乃

様を。假名真名よくよく註し給へき旨。飛
脚を以て。上人へ申入たりける。上人御返
事云。念佛のこと。いまゝくゝ。ゆゝしく
はぬ事にて侍へし。專修雜修の間の事いと
しき沙汰侍ること。昔こゝに侍りし法門の
くゝきゝ。ゆゝしき事にて侍りけ
たまはるゝ。聖の許へまゐり侍りし。
後世の事をはいとゝ侍へき。在家の者

たゝ其後生たるものわ此ぬ面きこゝゝ。何
事の此しんとゝゝ此ひゝうは。ひゝゝわ其申
此し様わ生死をゝられ事こゝわ面うゝゝ
多ゝく此へらゝゝそ其中ゝ極樂ゝ往生する。
こゝ此佛の衆生をすゝ。生死をいゝぶ出せ
ゝ如一其道ゝゝ極樂ゝ往生ゝる
行又様ゝゝ多ゝく此へらゝゝ其中に念佛い。
こゝ此弥陀の一切衆生其ためにこゝゝ誓ひ

ゝゝ本願の行なれゝ。往生の業ゝ
とゝてわ念佛ゝゝくわ此。往生せんこゝもゝ。
念佛をこゝそわ世ゝんと申此き。何況又在家其
者其法門をゝゝゝ智恵をゝゝんゝのい
念佛の外ゝわゝゝゝ往生すへゝと
いぬゝとゝゝわゝゝゝ法門をゝひ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ念佛ゝゝ外ゝ。又
何事をゝて往生すへゝとゝを受孫わゝゝ

念佛ゝ申をもて。弥陀の本願をたのみ奉て。
往生せんと思ふくあるゝ人ハ。在家の者
なんとい。おに事のあゝん世申ハしのぬ
うくそれ由ハ頼ハく。念佛を申ゝまつり申
ハ。又此念佛ハ申ゝ。たゝ一心ゝ
弥陀本願の行なりと。ゝ申事にを
あゝ。唐の代ゝ善導和尚と申ハし
人の往生の行業をいてハ。専修雜修と申。

二の行をもゝ。すゝ給へるゝ。専修と
いぬい。念佛ゝ。雜修といぬい。念佛の外の行
なり。専修の者ハ。百人ハ百人ゝ往生し。
雜修の者ハ。千人の中ゝ一二人ありと
いへる也。唐土ゝ又信中と申者。これ有ハ志
ゝて。専修浄業文と云文を作て。唐土の諸人を
勸たり。専修ゝ五種の専修正行と云こと
あり。此五種の正行ゝ。又正助二行をゝ

てゝ。正業と云ハ。五種の中の第四の念佛なり。
助業と云ハ。その外の四の行なり。今没定して
浄土へ往生せんと思ふ。専雑二修の中ハ。
専修をもつへよりて。一向に念佛すへし。
正助二業の中にハ。正業の勸よりて。二心なく
たゞ第四の稱名念佛をもつへしと申侍しなり。
をもつき者ふかく心をとゝめ侍ぬさてゝ
念佛ハめてたき事にてあなれと信して。

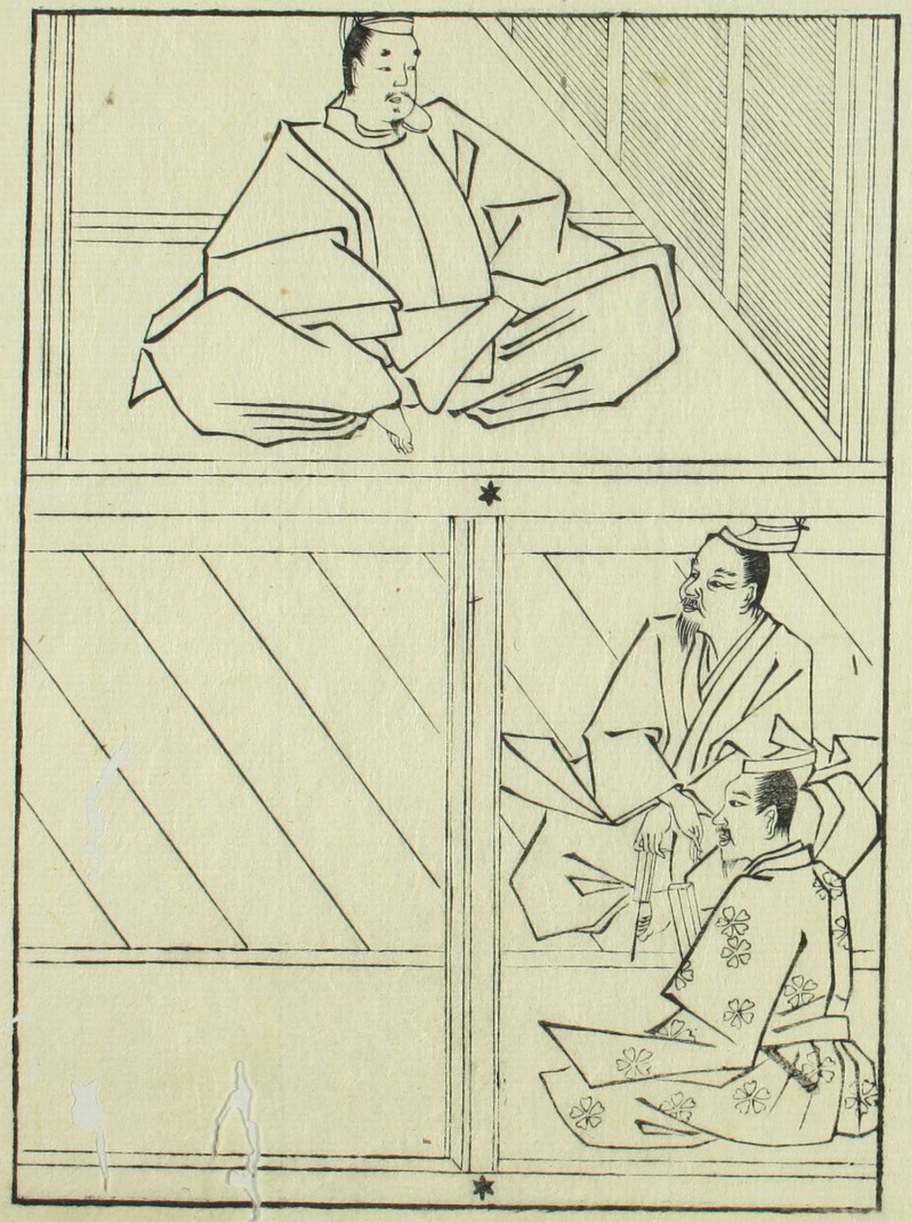
中侍そうに侍。件の善導和尚と申人い。民
ある人なも侍ハ法。阿弥陀佛の化身なりてたり
ま侍ふをとゝへす。えらせ給ふこれを
よを僻事なりと。ぬく信しまい
らせて。念佛い仕侍ハ。そのたゝ弥陀
侍ふ。文共多く侍ふれとも。文字をもつ
侍ハぬものなれ。たゞ心ヤ成聞侍て。
後生やたすり侍。往生やし侍とて。申侍

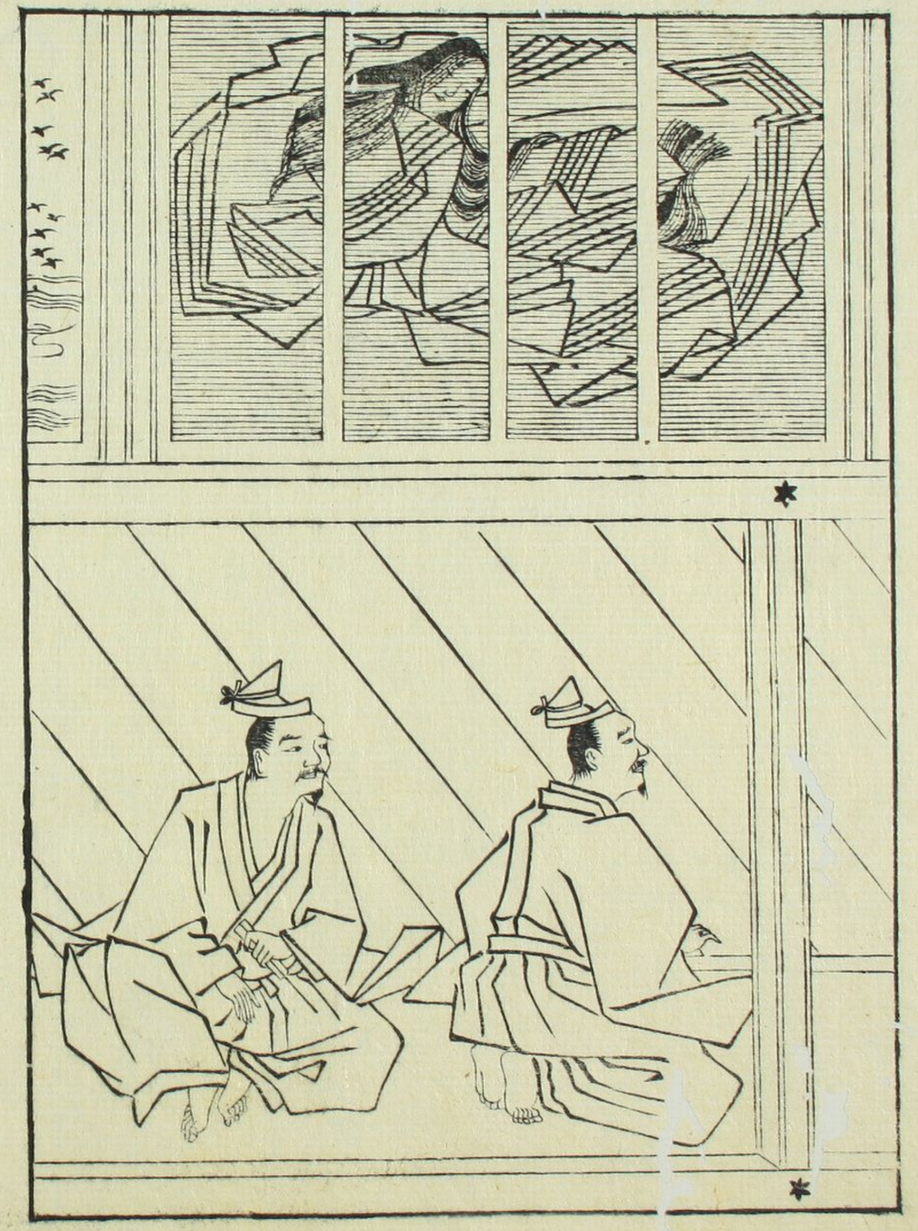
狂うたらきこえけるも見うしやと侍て。少て
申者ども侍なりこゝらまこと狂よ申さぬ所
有て。申くるまうくる申さぬ所て。あやまちも
あるなんどして。あつき事をこそ侍へ樣こそ
難答侍るまうてと侍へこそ。時ありのそこてハ。
いつれ為詞ともう侍いんちんよ。書てまい
らせて侍いんをあつく侍ぬ為く侍。たゝよく
く御くゝひ侍く。早晩よき樣ありこそ。

くゝかゝハせ給ふ人又念佛申をへゝ給とゝ
らまて侍ことを往生に志あゝん人いそれよ
り侍ゝ。念佛いよく申ゝ行ゝ給侍
ことを道心なゝんをけいそれよりわ侍ゝ。
くくよたけくいゝく思食事侍ゝ。いう
なんにつをてをこれるひ往生なんと。
人をくまゝ給御身よかきりてい思食へし。
殿ハ道理ふくまわく。僻事ハたゝまぬ

こゝに俗と申あひて世へこれらなる
聞食さんよ。念佛僻事よくあわるり。今ハ
なほそこ行〳〵ゐくこゝろを俗ハ。ばつれ
ざるんいいうて申こゝを思ふも。無益ハ事
よてこそ俗ハんすま。已上取詮 ふつの法ハ翌年四月
廿五日。信濃前司 千時山城民部大夫 行光ゐ奉行よく。
こゝにゝ御教書云。津戸郷内建立念佛所。
令居住一向専修輩之由。所聞食也。彼宗之子
細為有御尋。為宗之輩一両人早可被召進
之状。依仰執達如件。云云 仍同月廿八日。浄勝房。
唯願房等ハ念佛者をあひ具して法華堂の
前の二棟ハ御所と号する南向の廣廂よ糸
俗ハ重ての御尋につきて津戸三郎ハ上人
御返事ハ趣をそこにうへく用意しゐる
事なれとこゝほわれく申入るよ浄勝房
等ハ念佛者ハ年来所学の道なれハ法藏比丘

因位より。弥陀如来成佛の今よ至るまで。
凡夫往生のこゝろゝ次述申ス所い面に
立申しまゐらゝく聞食ひゝゝ所まるにゝて。
専修ス行よをいて。子細あるへゝ次をゝ乃
ゝゝたゝ行面きよ。仁出ち所ゝ所ち。
いよゝ念佛の行をこたりたるゝ所い。建
保七年正月右府薨逝ゝ。二品禅尼の御
ゝかゝひらゝて。御骨を此所よ





為守うく上人の勸化を信し。偏に極樂に
往生願ひて。二心なく念佛し給ふこのおれ
しくい出家に本意をとけたりやと思なるり。
関東乃免許なり給ふ。在俗の形あり。
法名願たて。戒をうけ。袈裟をたえ付給ふ
より。上人のそを申入弟子。その志を哀
まて。寛弟供奉のかゝ。戒本十重禁に
次第。なるひに上人抄記に三聚淨戒のしる

たゝ[illegible]たゝ[illegible]又袈裟をつけ。
尊顔といぬ法名をくゝさまよりたゝ。此御返
事[illegible]ハ[illegible]後へ。偏に出家に思ひなりて
念佛をゝ又其後上人所持の念珠を所望し
なる御返事にゝ。おもき病に思食事へ。此世
一ゝ事ゝよりあ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]の世ゝ[illegible]ゝ[illegible]
良よ[illegible]へ。極樂に此度まいりあはせ給
ゝ。常に持て[illegible]ず[illegible]ゝ[illegible]御念佛

なゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]取詮又或云
時ゝ御文よハ。此度うまれ[illegible]ゝ往生ゝ[illegible]ゝと思食
きゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]身とゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝき念佛往生ゝ法門よあひたゝ婆婆を
いとゝ[illegible]心あり。極樂ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]弥陀の
本願深し。往生ハ御心よある[illegible]ゝ[illegible]
ゝ御念佛をゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

入て身をうしなひざりけるとき事にや。
建保七年正月右丞相実朝公薨逝のこと絶入を
ふりく出家をいらげ上人よりまゐらせられ
ける法名被たきく尊願ゝて申ける間上人往
生の後八日より隨て極樂の戀しく年ゝをひて
織工の人いとゝしく覺るまゝに此御文を取
出し拜見して はらくむしの人せ殺へと申
られども室くの歳月ゝ送る間上人の門弟

浄勝房以下の僧衆をゝて仁治三年十月
廿八日より三七日の如法念佛をゝこなひ十一月
十八日より結願の夜半より道場にして高聲念
佛しこゝ腰を切て五臓六腑を取出し
練大口にたくこて悉てうゝろの河にすて
ながせよりて夜陰の事なれ人更しらざれを
ゝ浄勝房後僧衆よむひて加様に出家
籠居して大臣殿の御菩提をとぶらひ申て

たけて主君のなごりを慈しまし
まいらせうへ上人を極樂へ必ずあへとおも
ひしよりて往生せしして穢土のす
いのあらくを益なり釋尊八十の御入滅
上人八十の御往生尊願又滿八十ぬ第十八
念佛往生の願なり今日又十八日なり如法念
佛の結願に當て今日往生したまへ殊勝の
事なるへしれと申をれいく用意ありし

思をよりあるはの詞と心得て實に
めてたくそ侍ると返答するにそれ
夜をあけ十九日しもぬあへて苦痛あ
ひ今臨終すゑき心地をなりをれ子息の
民部大夫守朝をよひて切なる腰折あ
けてまろきをとゝいぬ物の殘く臨終の
ふるまを覺ゆるなりてて見よと申をる
時そ少くしく人まちに成る心をの祈に

まろき物のあるよう成申されて手を入て
引切てなげすてゝ御こゝろ乃こと成る故なり。
臨終ハのゝるたるゝ色にして申たる色人こゝ驚き
あいて〻ゝ老人婆婆いとつゝく極樂の御ゝ
つゝき志日よ隨ていやまさりなまハ今一
日をらくまいたくてかくさるゝひぬる
よう成きくごとく申たれて實よ願往生ハ
志の熾盛たるあらはまこゝる人これ涙成

たるゝぬいれ。すこゝきのいゝをなくて
念佛しゝるゝ。七日まくのひをまハゞひの
水ハゝよゆへたるへしてゞひをこゝ
めて塗香成用たるゝ氣力を更よたゝる
へを。祇なく痲を愈よゝる。後よハ時こ行
水を用ゝ成ゝゝゝや。正月一日にをなりに
ゝ死ゝ成して往生すべきこゝ
ゆへゝり。尊願ハ正月一日ハ祝よい。臨終乃

儀式をあらしてまひらくいたされ日来れ
あるよりたいぶしてこんにち往生すべき
故に延引したりと雖ども頻に念佛し
たまひしこと其日をすぎぬ次の日をまたれぬ。
只今臨終とおもへき心地をたまはりたれば上人の
御文を又取出しぞ往生の後は思出べきまれ。
必極樂に参りあへと自筆に御文をのせ
られたるいそき参らんと心をはげし

ばかりをそくむかへたまはるこの心うく侍
りし。連日にたづぬ申たるに正月十三日乃
夜の夢に来十五日午剋に迎参らん。
上人来て告給と見るぬ。ちえてこまを語り
歡喜の涙を流しぬ。件の日のあわにし
うは上人よりわたされる袈裟をかけ。念珠を
もちて西に向ひ端坐合掌して高聲
念佛數百遍をとなへ午に正中に念佛と

共より息絶ぬ。紫雲室よりたゞよひ。異香室に
こめ。茶毘の庭に至るまでうせずして。
なをきえさりたる。腰を切て後水漿絶
斷て。五十七日に氣力たゆまずして。
む所なく。遂に往生をげたる。不思議の
事ども。抑今の世の所乃自害往生。水漿を
斷て後。五十餘日絶ぬる事。殆信をとらわか
たしといへども。この代子孫上人の御消息に
ひよ念珠袈裟等伝相傳して披露をする
事世にてくきたなし。たゞこれ尊願の不思
議の奇特をのぞむ。餘人さらなり。餘人さらに
これを行せよとはあらず。九上代上機の
事いまゝくこれをさゝるべく。末代當世の
行者ハ機根よハきゆへ。ようゝ思ひ
をのあわしもそれ朝のそこをもて後
悔乃一念を行ゝわめへし。志ゝ我ハ何の詮ゝ

あらん。上人をいけるを念佛の功にをもふ。志
たのい往生をうがゝ法ぞをかくても。此身
よいたをひるづしよ事をなれと心得べく。
称名ろよ念佛して。畢命を期をせよと
をれ禪勝房よいちげ乞乞乞。鎮西の聖
光房を自害往生。焼身往生。入水往生。斷食
往生等の事。末代よい斟酌すへしと。誡めを
うれなるをうや。ゆゆしくこれを行をへう乞。

ゆゆしく上人の勸化を信して。念と相續畢命
為期の行をたとむ。をきをのなり